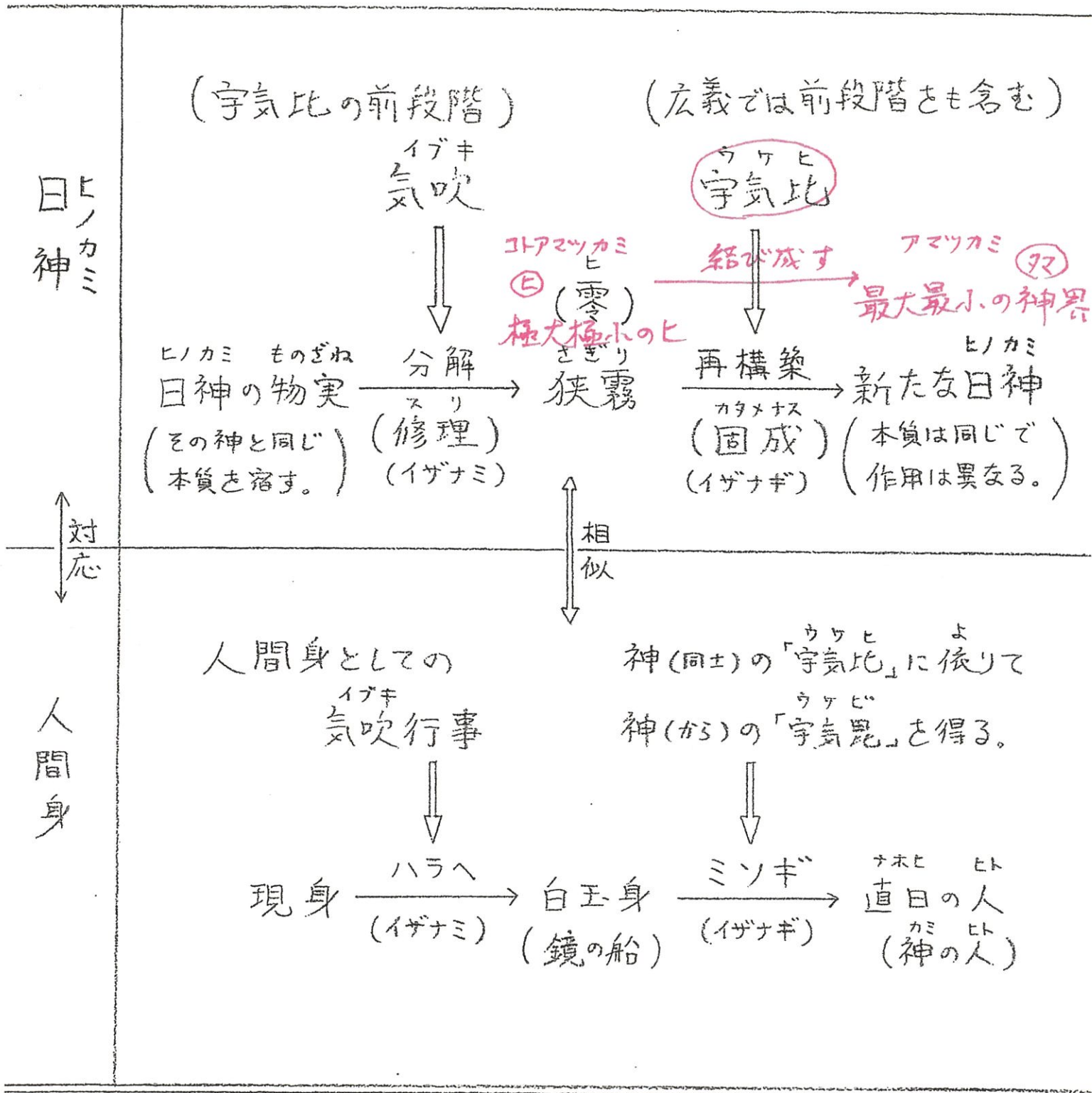


「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は④ 14頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(一)より。

さて、^{ウケヒ}「ウケヒ」というのは、少々神話的な表現を借りて説明するならば、「二柱の^{ヒノカミ}日神が^{あひさむ}相契りて新たな^{ヒノカミ}日神を^{カミツサ}産み出す神業」のことである。その^{こころ}処は「サギリの中」であり、その「サギリ」は「^{イブキ}氣吹の結果」として生じた「^ヒ零」そのものである。

／即ち、「イブキ」とは「^{ヒノカミ}日神の^{ものごね}物実を砕いて元の^ヒ零に戻す作業」であり、「ウケヒ」の前段階である。そして、その上で、「その^ヒ零を組み直して新たな^{ヒノカミ}日神を産み成す作業」が「ウケヒ」なのだ。
^{ものごね}物実とは、その神と同じ「本質」を宿した箇体であり、それ故、新たに生まれた神もまたその同じ「本質」を受け継いでいるが、一旦砕かれてからまた組み直された実体であるため、その「^{はたらき}作用」は^{オヤ}祖たる神とは異なっている。異なっているからこそ、「新たな」^{ヒノカミ}日神である、と言えるのだ。

／また、「無宇宙全体」という規模で考えれば、「^ヒ零」は即ち「^{ヒノカミ}〇神」である。よって、「ウケヒ」の説明としては「^{ヒノカミ}〇神が新たな^{ヒノカミ}日神を結び成すこと」と表現することもまた可能だろう。人の身ながらその境地を知り、そうした能力の一部を分与されることを以て「^{ウケヒ}神の宇氣毘を得る」と称する。

7-ム

おこらしくは、個々の用語が古くから使われており、

7-ム

それぞれの水の用語と文辭でつなげた結果として、

古事記のような神話物語もあった。この神話の

内容は『「極大極小の地」が、「二にして一」であるイザナギ・

イザナミとして、宇宙を修理国成している』というもの。

(日 呂 夕に二つ並ぶ神象
地 田 田に二つ並ぶ)

例
0にして、1にして

コトアツカミ
極大極小の地



アマツカミ
イザナギ・イザナミ

古事記の
国生み神話の
実相

季40
田×ヲ・田
1にして2にして

クニツカミ

2

3

4

作用としては
修理国成

器物としては
アマノホコ

コトナミとしては
コヲロコヲロ

象徴としては
オノコロ島

実際には、
同じ一つの状況。

無宇宙から宇宙が生成される際の状況」

コト
アマ
ツカミ
の
領域

ヒ
宇 (極大極小の零) **ヒの段階** ミタマ 御霊に対応

(「本質」を損なわない形で
「そのままに」組み直す)

アマ
ツカミ
の
領域

ウケヒ
宇気比 (最大最小の神界)

カミコ
ミタマ 御魂に対応 **(神子)**
(直日)

タマの段階

カミナガラ (→神、治らすなり)
(上に同じ)

無宇宙

クニ
ツカミ
の
領域

ウケビ
宇気毘 (これによって常人も
直日の人となる)

ミタマ 身魂に対応

宇宙

そのための具体的行為を指して
「宇気踏ミタレバ」と言う

→「ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ」
このように物事が完成されてゆく。
さまを賛美して二十一秘言をのる

「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」
ハラヘコトバ

マキリツドヘルヒトビト クニツチヤマカハ クサモキモ ソラユククモモ ツチクゲルムシモ アメツチノアリノコトゴト ケフノハラヘノミマツリニ オノモオノモガ
参集 閑留 人人。 国土山河。 草木。 空行雲毛。 地潜虫毛。 天地乃在乃尽。 今日乃祓乃御祭爾。 各自各自我。
アヤマチオカシケム クサグサノトガトイフトガ ツミトイフツミノ アカトケガレトヲ ハラヘヤラヘキヨメタマフ カミノカミワザ カミコトタマヲ ツツシミカシコミヲロガミマセ
過 犯計牟。 雑雑乃尤云尤。 罪云罪乃。 垢斗穢斗乎。 祓却閑清給布。 神乃御惠。 神言靈乎。 敬美畏美拝美坐勢
トマラス 斗白須。

伊宇袁衣耶。

宇斗乃宮。 宮斯呂築成住我乎。 神乃我叙斗。 神知須邇邇。 神乃神輪叙晃耀赫灼矣。

阿知米。

阿知米。

阿宇袁衣耶。 宇。 宇。 宇。 宇。 斗。 宇斗。 宇。

カク ウシナヒテバ アメツチノアリノコトゴト ケフヨリハジメテ ツミトイフツミハアラジト ハラヘヤラヘタマフコトノタフトサヲ カシコミカシコミテ ヲロガ
如此久失氏婆。 人天万類尽天尽地。 今日以降。 罪止云布罪波不在止。 祓却給事乃尊乎。 恐美惶美且。 奉

ミマツリ キヤマヒマツリ マツリマツルトマヲシマツル アマテラスオホミカミ カムロギノミコト カムロミノミコト タケハヤスサノジノミコト オホミナハクタヘマツリテ アメノ
拜。 奉感謝。 奉 祭止奉白留。 天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命 止。 大御名波奉称且。 天

ミオヤアメノヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト カシコシ
祖天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊。 畏。」

③

②

220 ?

①

天祖の作用力を天照坐皇大御神と云う。

その作用力を二つに分ける場合

大字宙を領域として分ける方法が二通りあるので、

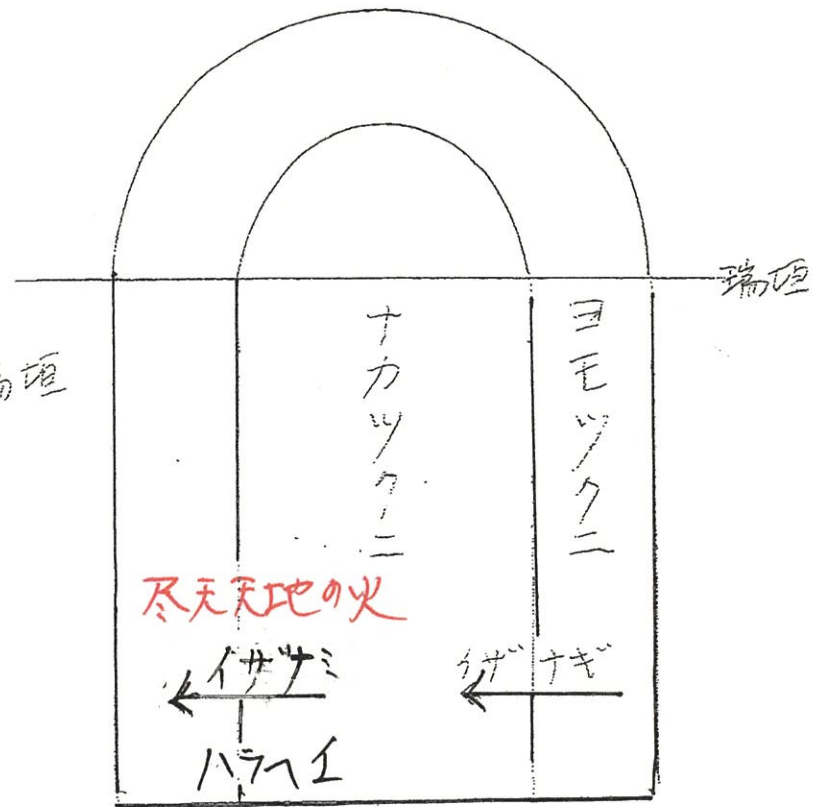
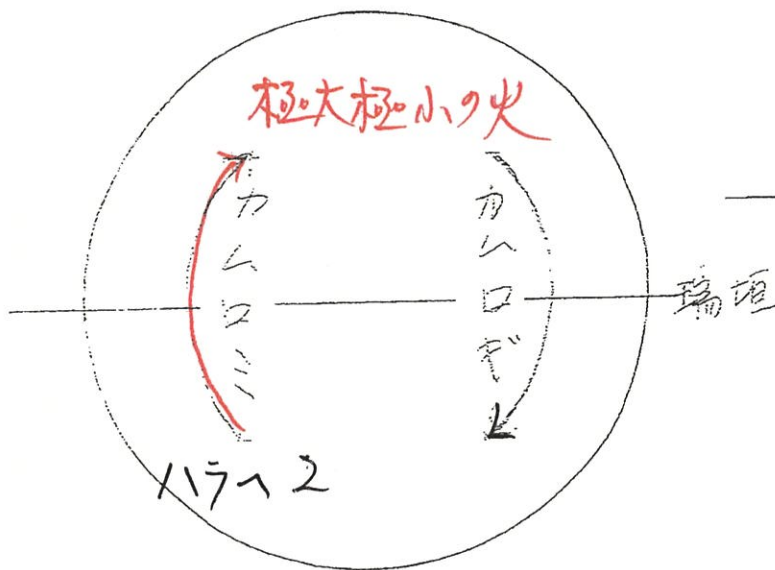
それに応じて、作用力の分け方も二通りあり、

それぞれに別個の神名が当てられている。

ミタマツリ

1. 上下にわけける。

2. 内外に分ける。



上から下へ カムロギ
下から上へ カムロミ (スリ)

カタメナス
外から内へ イザナギ
内から外へ スリイザナミ

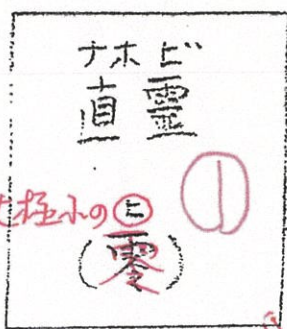
修理図式の機能図 直霊と空零

根本資料

組み合わせる

構造体

無
宇宙



ヒノカミ

(中心) 故に.

→ 日神 (アマテラス) 36神界.
(宇宙の中心)

ナホヒ

→ 根本魂 - 直日
(管体の中心)

統率

統率

ミヅガキ
瑞垣

流出 (イザナミ)

宇

空零
(零)

国生み
(イザナギ)

(外郭)
(ハルヘX)
十四島・三十五神

マガツビ
②

マガツビ
カミに帰順したる妖魔
(上位の身魂・外郭)

死後、解体される
(ツキヨミ)

調伏 (スサノヲ)

神話では
ヒルコ

ホノカガビ
コノカミ
(ヨモツヒラサカ)

禊ミシキ

マガツビ
妖魔群
①

マカレ
を分解した結果
としての空零

ハラヘ
⑤

禊

(肉体身 など)

尽天尽地の火 ②

(実際には金匱に)

素材領域

カタマナ
ス
列

管体領域

宇宙では、ヨモツクニ

宇宙では、ナカツクニ

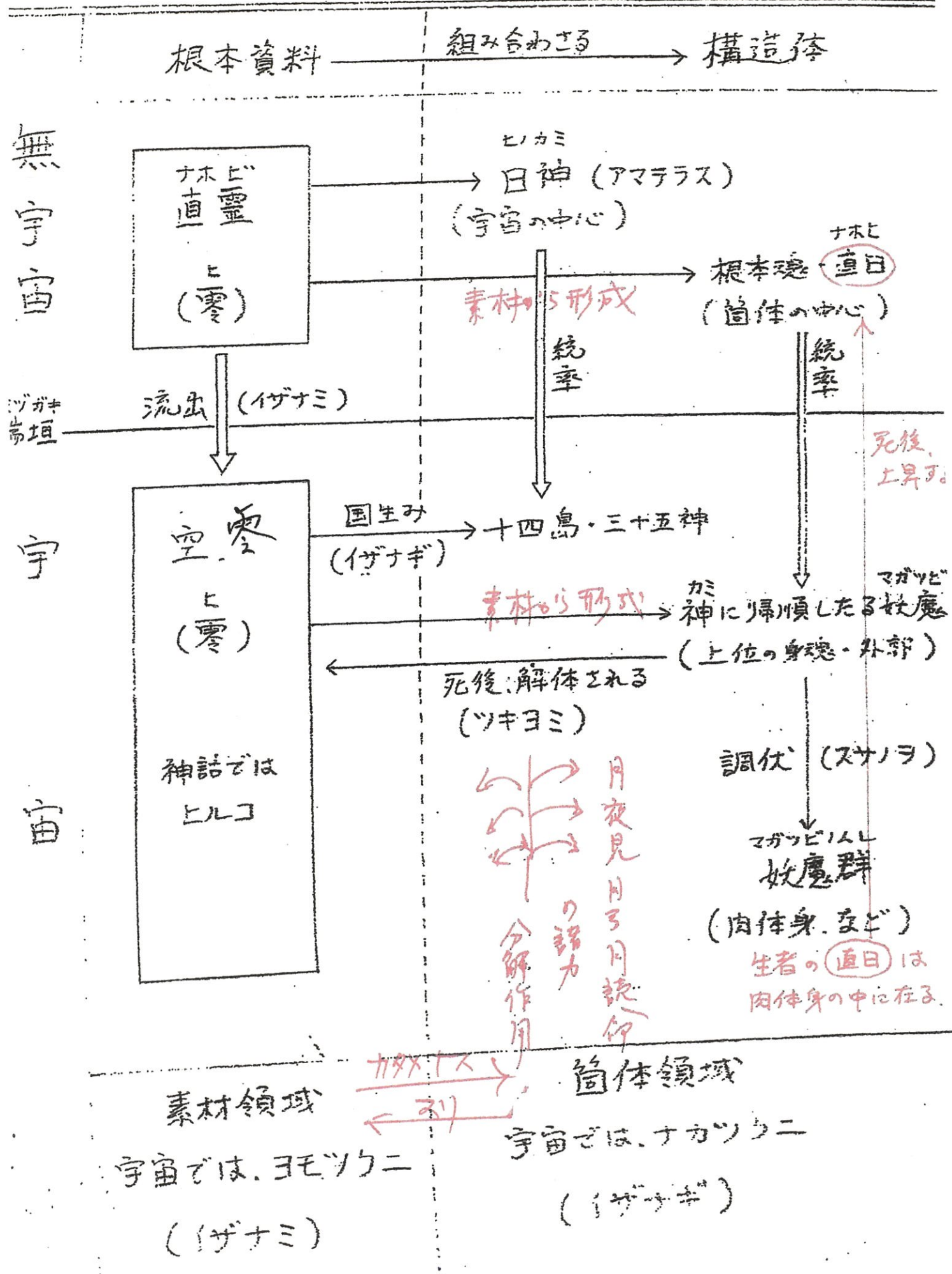
(イザナミ)

(イザナギ)

付ナギノ材ハカミ

ハラヘ
②
宇宙から
無宇宙へ

経国成の機能図 直霊と空零



めなめはるのちながしり
ももどしきだちむるより
うしりて。

これ高木神の教ふるより
して弓矢の秘言盡なり。

月

多田山公

月讀命は伊邪那岐命が祓禊の事を行ぜられて右の目を洗はした時におうまれになられた神、日神とおならびになつて夜、日神を治しめす天命を有せらるゝのである。

夜食国と云ふのは日に対するで、盈虧の義で、干満を知るところの潮と同じである。

生死遷流變転出沒を指示したので、宇宙は成住壞滅の物ではあるが、水と波との如く起伏すると云ふまで、固着凝結と見るゝも実は人の身のはかなき迷ひである。

然れども、人は時間のうちに生き、空間のうちに動く。

生きつつ、動きつつ、心樂し、世を安らかに経過せんことを以するので、相互に道德倫理を可らねばならぬものと規定す

るのである。

随つて因果応報をも教へ、諸惡莫作衆善奉行と勤むるのである。

けれども因果が無いのではない。

医者は病苦をうつたふるものに鎮痛剤とか麻睡薬とかの注射を為ることがある。

麻薬は病患を癒すのではない

が、患者はその薬のために苦痛を忘れることができる。苦痛を忘れて仕事を為て居るうちに、病氣もまた治つて健康体となることができる。

忘れるるといふことは実に不思議である。

人の身に睡眠の有るのを思へば、天国楽園とは夫かと考へらるるではありませんか。

月讀命 夜食国ヲ統治ス。

月夜見の矢は、よのをすくにをしろしめすなれば、つきやみ

のかみわざをとらせたまふともにも、つくゆみのかみかかりをさづけたまふのである。

其の「つきやみのかみわざ」とは因果応報の嚴則で「つくゆみのかみかかり」とは一超直入如来地の神通力無量力である。有にあらず無にあらず、有無の間にあらずして生滅起伏す。

う。ああひがてんじんゆうあい

因果無きにあらず。

応病施薬南無薬師如来。

因果有るにあらず。

唯此の衆生を愛して南無無量力吼如是天地を碎きて衆生を散出し給ふ。

如是天地白玉楼

破顔呱呱莞爾来

单身錦衣隠乎去

西東北南悠遊無辺。

心して我は行かなん朝夕に神の心を心とはして。

秘稿「月」

無
宇宙

(ナホ)

(如來地)

~~秘稿~~第
一

月

階

満

層

(ウミツ)

命

第
二

月

階

三

層

(サキツ)

命

第
三

月

階

満

層

(マミツ)

命

第
四

月

階

満

層

(アミツ)

命

第
五

月

階

満

層

(クミツ)

命

第
六

月

階

満

層

(セツ)

命

第
七

月

階

満

層

(ゲツ)

命

第
八

月

階

満

層

(カゲツ)

命

第
九

月

階

満

層

(ハゲツ)

命

「フクヤマノカミカガ」は一起直入如來地の
神通力無量力

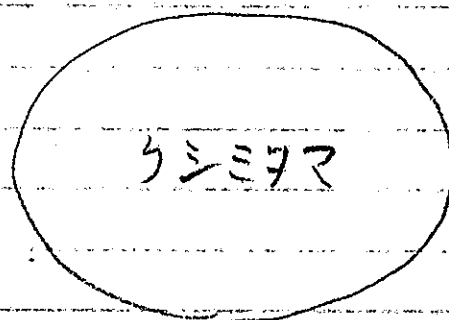
ここまで来れば、無宇宙とも直結する。

「フモヤマノカミカガ」は因果応報の厳則、

故人のミツツには必ずこの厳則が

適用される。

『死後、解体される』(ツキヨミ)の説明

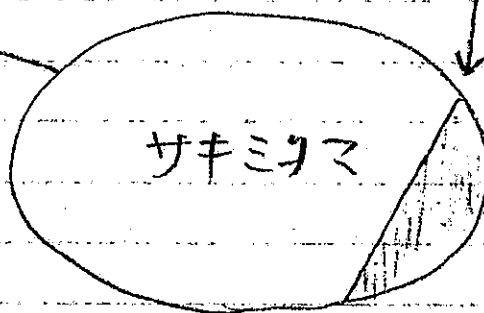


ツキガキ ヒスミノミヤ
玉垣の日隅宮



ヒスミノミヤで粗から精へと
組み直す際にも
あまりに粗雑な部分は
組み直しようが無いので、
切り捨てざるを得ない。

中心に正しく帰順
した部分は、
「神と化りたるマガンビ」
なので、
切り捨てられることなく、
日隅宮で組み直されて、
ウシミタマの一部と化す。



(矢)

この切り捨て
られた部分が
ツキエミノミヤの
許へ。

帰順してない
マカツビ

(2020.2.18の図中。
「同下」の解説でもある。)

人間身においては、

直日 (本来の神)

サキミタマ・ウシミタマ (神に帰順した子マカツヒ) → マカツヒ

マカツヒ②

アラミタマ・マミタマ (まだ充分には神に帰順
してゐないマカツヒ)

マカツヒ①

此の詩は、正誠正義であれば正位正業を得て、山河大地も一圓光明体なることを実証し得らるるのであるとの意を詠んだので、正誠正義が「火」で「日」で「光」であることを教へて居る。

正誠正義にして神國を築くのが日神事で、之れを成さしむるは直霊の妙用である。直霊の妙用と云ふのは「ヒ」なる霊が、直日の統率のままに妖魔群団身と成り、妖魔軍として妖魔を調伏済度救出するの意で、妖魔なる禍津毘が直く正しく妙用を現ずる神と化り神の神業を以て太平嘉悦の楽土を築成するの義である。

神に帰順した禍津毘の活用だ

と云ふに等しいので、大禍津日とも称へて、神ならざるの神である。古事記に「別天神」と記したのは、此の意味であつて神魔同几に在るのである。

神と魔が同几に在るのは神ではなくて神人であるから尊と称へて、独神とも隱身とも萌騰之物とも天神諸命とも神聖とも純男とも人とも独化之神とも俱生之神とも一神とも別神とも天祖とも祖神とも二柱神とも傳へたところの命（みこと）で天命（いのち）で大道（みち）であります。之れを祖神垂示の大道と呼ぶことが出来る。

直霊と空零

根本資料

組み合わせる

構造体

(7レ)



ヒノカミ

日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

根本魂 - ナホヒ直日
(管体の中心)

流出 (イザナミ)

統率

統率

状況・状態を表現する言葉

国生み

(イザナギ)

十四島・三十五神

空零
(零)

カミ ①
神に帰順したる妖魔

(上位の身魂・外部)

死後、解体される
(ツキヨミ)

クシミタマ
サキミタマ

調伏 (スサノヲ)

マガツビムシ
妖魔群

(肉体身、など)

神話では
ニルコ

カタメタス

素材領域

管体領域

宇宙では、ヨモツクニ

宇宙では、ナカツクニ

(イザナミ)

(イザナギ)

無
宇
宙

宇

宙

マ
タ
タ
①
トリ
ム
ラ
ク
シ
テ

②
ユ
ラ
ト
ベ
ユ
ラ
ユ
ラ
バ

②

~~(4/10)~~

主体	別天神、神ならざるの神、神魔同凡のカミ (別名、大禍津日) オホマガツヒ
↓	
その作用	(実際には、多数ある作用力のうちの一つ) 直霊の妙用、マガツヒ(神に帰順した禍津毘)の活用。 ナホヒ マガツヒ
	ヒ 「零」なる霊
第一段階	1. これが、 ^{ナホヒ} 直日(中心)の統率のままに〜と成る。 ↓ 妖魔群団身 (中心の統率に従っているのだから、 ウシミタマ サキミタマ これは「神に帰順したマガツヒ」である。
第二段階	2. これが、妖魔軍として(妖魔のままに) 〜を調伏済度救出する。 ↓ 他の妖魔 (まだ神に帰順していない、マガツヒ) マミタマ アラミタマ
└→	こうした二段階の妙用によって、 太平嘉悦の樂土(神国)が築成される。

二火の意味

向かって左の火

(神が3見て右、カヌナ)

ミツギ
→ 禊

- ① ノリトによって、左の火を
フトアツカミの領域
(火神ミカミ天照皇太御神)
の零とする。

(即、極大極小の火=零)

- ② これを各人に注ぎ込む
ことで、禊行事を行なう。
ミツギ

向かって右の火

(神が3見て左、スリ)

ハラヘ
→ 禊

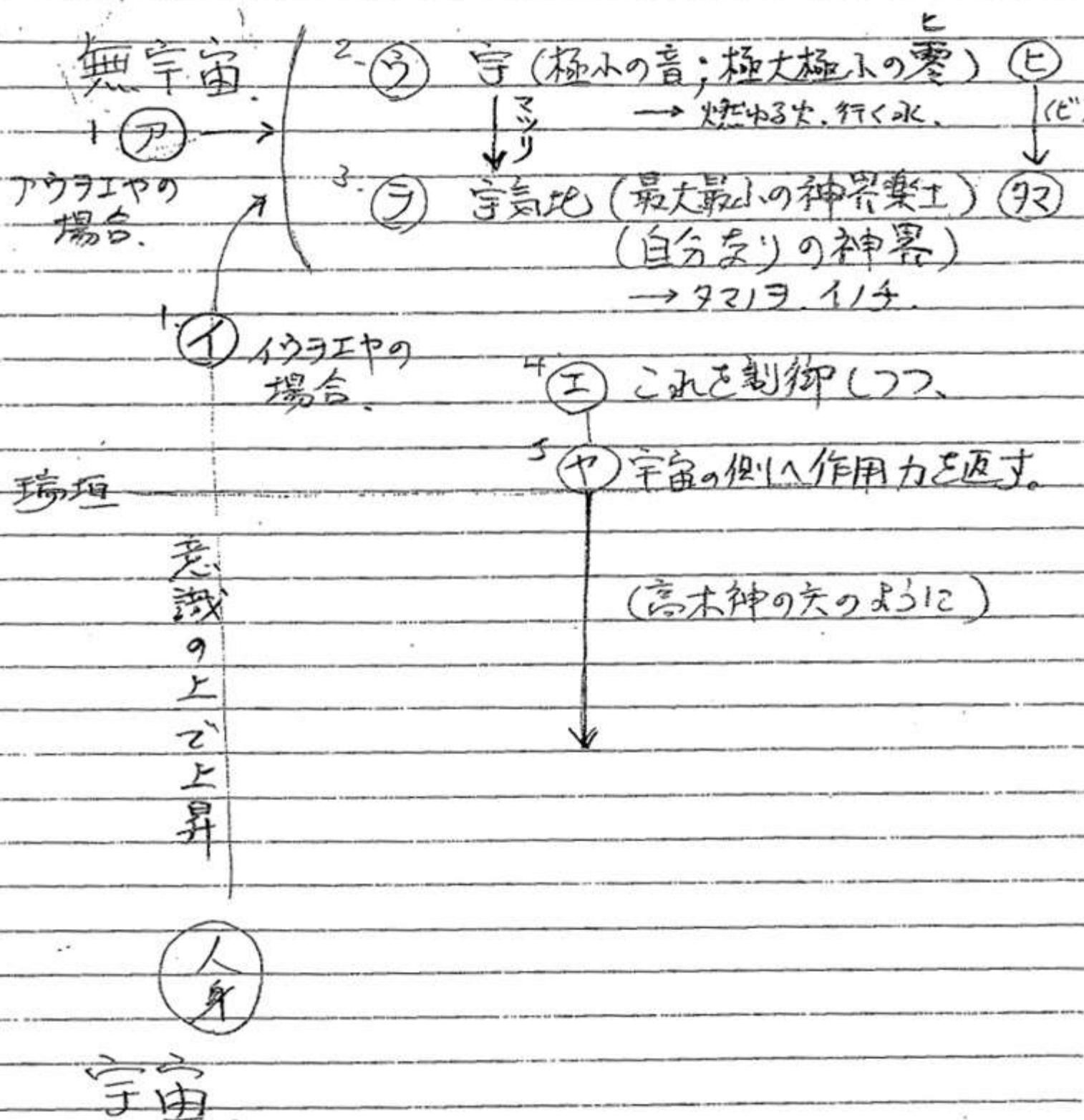
- ① ノリトによって、右の火を
火神カグツチの火とする。

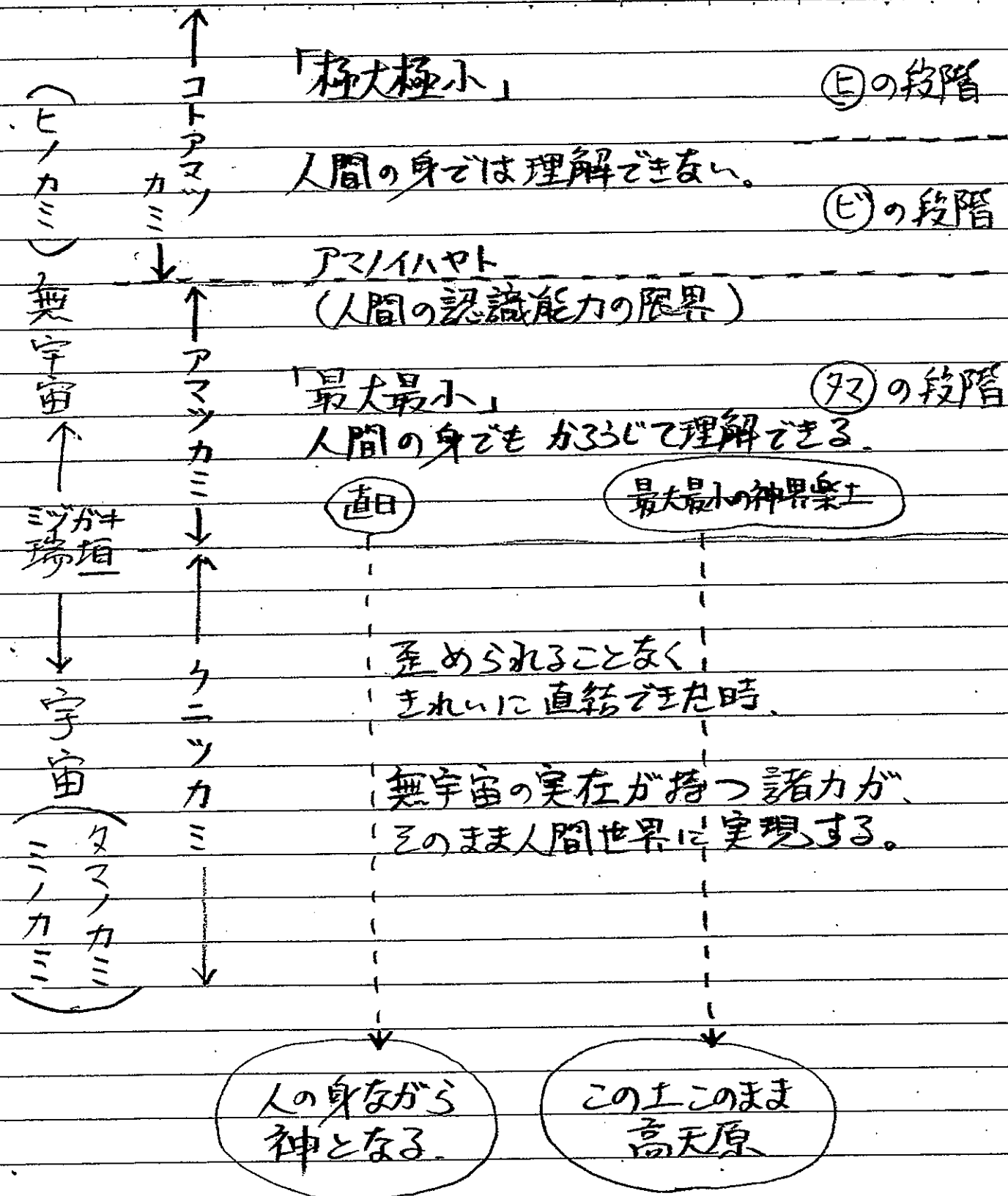
- ② この火によって、禊行事を行ない、
罪穢れを焚尽す。(ハラヘ①)

- ③ 焚尽された結果としての火
(ここでは尽天尽地の火と表現)
を、さらに無宇宙へと送る。

(ハラヘ②)

イウヲエヤ と アウヲエヤ の区別





日本民族が日本語としての神言靈^{カミノコトタマ}を忘れ佛教が傳ふところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈^{カミノコトタマ}を傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈を云ふ者はあつても全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と称するものの皆然るところで為に却つて甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

ふるべ^{カミツヒ}ゆらと古典に載せたのは斯の^{マゴト}ような禍津毘の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由^ユ良止袁布留^{ラトヲフルベ}込の七音を加へて布留邊由良

由良止袁布留^{ユラトヲフルベ}邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音^{カミノコトバ}と化るので阿三^{アサマ}忙銀^{マギニ}儺^ニ吽^{ウン}吽^{ウン}尾^ビ觀^キ南^{ナム}の音は禍言であつて阿三^{アサマ}忙銀^{マギニ}儺^ニ吽^{ウン}吽^{ウン}尾^ビ觀^キ南^{ナム}吽^{ウン}但羅^{タラ}合^ニ吒^カ悍^{カン}漫^{マア}の音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの祕言靈で神直靈^{ヒメコトタマ}の神言^{カミノコトタマ}である。

布留邊由良由良止袁布留^{ユラトヲフルベ}込の^{カミツヒ}ふるべ^{カミツヒ}ゆらゆらとをふるべ。
ぬなとももゆら。

浅間山人こそ仰げ眞賢木の綠色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命^{イノチ}である天命である。之れを使用するは直日^{ヒト}であり神直日^{カミノヒト}であり神直靈^{カミツツナ}であり神日本^{カムヤマト}磐余比古^{イグレヒコ}である。之れを阿知米^{アチメ}阿知米^{アチメ}於於と教へられてある。

「^{エト}直日」も「^{カミノヒト}神直日」も(中略)

「アチメ、アチメ、オオオ」も、無宇宙の側の実在を指して
言う名称である。

そして、無宇宙の側の実在は、常に

宇宙の側にある存在を「資財」として使用する立場
にある。

人間においては、^{ナホヒ}直日が使用する側であり、

^{ミタマ}身魂は使用される側の存在である。

故に「エト」としての主体は「^{ナホヒ}直日」であり、

それ故に、ここでは「直日」と書いて「エト」と読ませている。

と
零 ----- ^{みえら}未生、物無きもの（^{みえら}體を形成してない資料）

{
あめつち な
「天地の生らざる時」
くらげなまたたきよる時」

と
「零」が「零のままだ」結び結んで「一」と成る。

↓
（「大字零の零と直結した實在であると
自覚したままで」といった意味の用語。）

ハジメ ----- ^な無きもの（^と零）が物（^と體）と成った状態

と
{
あめつち はじめ
「天地の初発の時」
カミ、ヒト、十

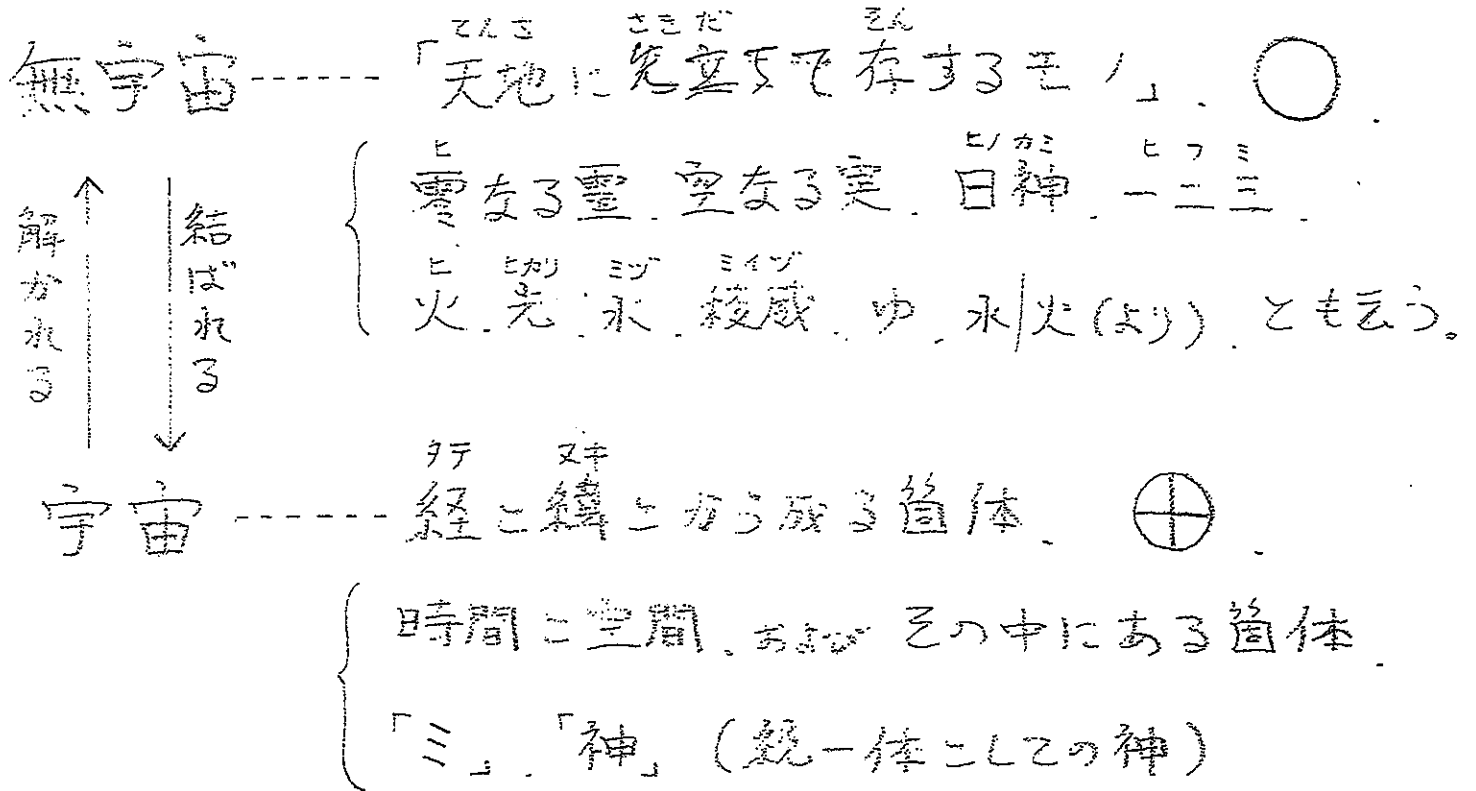
③「初発」の「發」は、^{ハジメ}單に「初」の内容を説明して

付加しただけの字。故に「初發之時」と

「はじめひらけし時」と読み下すのは間違ひ。

單に「はじめの時」もしくは「ひらけたる時」と読む

べきである。



また、多田雄三は「古」という漢字を「十」と「口」とに分解した上で、その「口」は、○の楷書であり、その「十」は⊕の省略形である、と解説している。

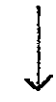
- ----- 無宇宙。零で靈で。時間や空間を脱却してそれらを産み出しているところの「主体」。
- ⊕ ----- 宇宙。上に述べた「主体」の「活用」として表出されたところの時間と空間。

全宇宙(二)より

ヒ 太極 零^ヒなる一^ヒ



ヒ 兩儀 二^フ (二^フにして一^ヒにして)



タマ 四象 三^ミ 四^ヨ (一^ヒなる四^ヨ) 一^ヒ 二^フ 三^ミ ヨ

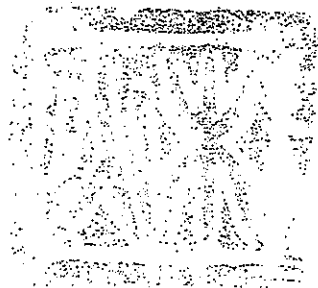
(火(火) ----- 「エホバ」
水(水)

→ 以上まとめて「天地に先立って存する物」

「陰陽不測之神」

以上すべて「無宇宙」の話

拙稿「数理(一)のまとめ」参照



無

ヒの段階

↓
ムスビ
産靈

種子の種子 (イムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ)

→ 一^ヒ、火^ヒ、零^{ヒウミ}海の零^ヒ (太極)

宇

ビの段階

↓
ムスビ
産魂

種子 (イムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ)

→ 二^フ、經^フ (經過) (兩儀)

宙

タマの段階

発芽したる種子 (イウタマ、タルタマ、タマトマルタマ)

→ 三^ミ、身^ミ ; 同時に、四^ヨ、世^ヨ (四象)

(ヨは無宇宙と宇宙の間を遷流する)

ミヅガキ
瑤垣

宇

宙

「完全に成立した箇体」の段階 → 五^イ

{ 中心 ----- 種子 (ヒフミヨ)
外郭 ----- 資料 (ム、空零、ウシビ)

→ 即ち「空零」とは、まだ「箇体」の中に組み込まれていない
「遊離した資料」である。「零^ヒ」と同質ではあるが、

もはや「中心」を形成する可能性はなく、その点^ヒが
「一^ヒ」とは全く異なっている。

() 内は「言霊の事」の頁数、(< >) 内は「修撰講義録」の頁数。

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの。○

{ 純一不可分の^ヒ零 (90) . 純一不可分の^ヒ零 (80) .
^{ミムスヒ}三産^ヒ零 (^{イウムスヒ}生産^ヒ零 . ^{タルムスヒ}足産^ヒ零 . ^{タマフメムスヒ}玉積産^ヒ零)
^ミ実としての^{ミタマ}御^ヒ零 (以上、130) .

これが ↓ ^{ムスビムスビ}産^ヒ零産^ヒ魂て

2. ○と○との複合体。⊙ (136) . ⊖ (68) . ⊕ (72) .

{ タマノヲ . ミヅノ . イノヲ . 千變万化する^{カシヒ}靈魂^ヒ . 七の活用 (89)
^{ヲテ}経と^{ヲテ}緯^{ヲテ} . ^ヲ男と^ヲ女^ヲ . ^メ凸と^メ凹と (91) . タカミムスビとカミミムスビ (^{ミムスビ}三産^ヒ魂 (^{イウムスビ}生^ヒ魂 . ^{タルムスビ}足^ヒ魂 . ^{タマフメムスビ}玉留^ヒ魂)
^ミ身としての^{ミタマ}御^ヒ魂 (以上、130) . 三不可分の^ヒ魂 (80) .

その種子が ↓ 芽をえすと <84>

3. 合体としての成立。⊙ . ⊕ . ⊖ (36) . ⊕ . ⊖ (78.末)

{ ^{ヲテ}経と^{ヲテ}緯との相交わりたるもの (91) .
 不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 (^{イウタマ}生玉 . ^{タルタマ}足玉 . ^{タマフメタルタマ}玉留玉) <80>
 人間身の上では ^{ナホヒ}根本^ヒ魂直日 <132>

全宇宙

多田山公遺稿

宇宙とは経緯である。

経緯の存在を云ふのであるから、在る物である。

経有り緯有る物なりとの義で支那人が此の文字を作つたのである。

現今の人々は、自分自分に、思ひ思ひに、古人の遺した言語文字を勝手な意味に用ゐる悪風が有るので、此の文字も、支那の古典としての使用法に據らず色色の意味に用ゐて居る。

或者は、太陽系だと云ひ、亦は有る限りだとか、人の知り得たる一切だとか、大虚空だとか亦或は仰ぎ見る限りだとか云つて居る。

成る程、其れ等は総べて経有り、緯有る物であるから、宇宙の外なるものではない。

けれども、之れ等は皆共に宇宙の外なるものを知らぬ人の云

ひ方である。

宇宙とは経緯である。

経緯の有る物とは箇體を指すので、大小長短広狭厚薄高低遠近深淺明暗凹凸強弱硬軟精粗疎蜜等の存在を云ふのである。

それ故に、太陽系だとか、大太陽系だとか、有る限りだとか云ふことではなくて、結晶體である。

日本の古典には之れを「産靈（むすび）」「魂（みむすび）」等と記し、各地方に「結神（むすびのかみ）」と称して奉祀されて居る。

玉の緒を結び結びて人の身は伊着くなるなる天安川。

それならば、その結晶體とは何が結晶したのか、結ぶとは何を結ぶのか、「産靈」「魂」とは抑、何であるか。

結ばれたる暁には宇宙であると支那人は傳へ、日本民族は「ミ」であると教へて居る。

「ミ」とは、身で、實で、稔で、充塞で、三で、品で、で、▲で、▼で、火で、水で、生で、死で、生死遷流で、「イノ

チ」で、「天命」で、「地風升」で、「風地觀」で、「水火既濟」で、「火水未濟」で、「地天泰」で、「天地否」で、「陰陽不測之神」である。

故に「ミ」即「神」である。

三は神であるから、三生^ミと傳へて、其の一とは十としての一で、皇で、九の統一體であるとの意である。

三即神で、即十で、即一で、即ヒ、即ミ、即ヒフミヨイムナヤコノタリヤモモチチミテリであつて全宇宙と呼ぶべきである。

統一魂神である十魂尊師である十種神寶で、完全に統治せられたる國である。

大國魂神で、大國主の主りましますところである。

世上、出雲系の神と称するは幽鬼妖魔が日神を拝して神と化したるを指せる名称なりしもの、何時の間にか人間身造作の神話と化したのである。

アチメアチメアチメアチメアチメ。
ヒフミヨイムナヤコノタリ

ヤモモチチミテリ。
アアヒガテンジンユウアイウ。

八雲琴我が掻き鳴らす束の暗を人こそ學べ身をば捧げて。
八雲琴我が掻き鳴らす神の寄板に今日も昨日も。

フルコトノフミミチワケテガヒクヤカミノヲゴトノコロコフロニ。

「古」を「イニシヘ」と訓む。過去の住處（すみか）との義時間無きの時間、空間無きの間である。

故に、無宇宙で、無人無境で無始無終無盡無邊で、^ミと支那人は描いたのである。

○は零で、盤で、十は^ミである。球と^ミ。

○と○との合成であるから、○なる無宇宙と、^ミなる宇宙を图示したのが、時間と空間を説明すると共に其の主體と用とを默示したるものである。

之れを「カミミヨ」とも「トヨ」とも「タマシヒ」とも「カマノハラ」とも云ふので、圓晃耀の日神である。

無宇宙から宇宙に作用して存在する日神の説明

○主體 ○致治日

天地の神にぞ祈る我が心大空の如くあるべく。

アチメアチメアチメアチメアチメ。

アメツチノカミノココロヲココロニテキツキナシタルアシハラノクニ。

波の音遠く聞こえて入江には人こそ集へ船出すらしも。

あさもよし城の上の宮は神ながら神のうけひて神しらすまにアチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコウ。以上。

昭和十一年九月二十二日

大日本祓禊所 語部宮

全宇宙(三)

多田山公遺稿

月宿る蓮の広葉我が君の賞でてぞ遊ぶ瑠璃の御園は。

瑠璃の園月こそ宿れ蓮葉の広葉動(以下不明)

あちめあちめあちめあちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。山祇の神の宇氣比豆賜ひたる山野の御食を神ぞ治らする。

あちめあちめあちめあちめあちめ。

昭和十一年九月二十二日 以上。

多田雄三筆録

産み出すことの嬉ししと人皆は立ち囃すなれ身をば捧げて。

人は必しも、生産をのみ喜び楽しむと云ふわけではない。

破壊することを楽しみとする場合も、苦しめ悩まして快しとする

することも有る。けれども、極度に快楽を感じるのは創造であり生産である。

産出する為には全力を盡し、全身を捧げて悔ひざるものである。

結びては嬉しかりけり束の間を人こそ囃せ千歳とは見て。

「黒闇淵を蔽ふへり。」之れを「エホバ」と名づけて

○なる火なり。

なりとは一(ひ)なる四(よ)

なり、田なり器なり四象なりとの義にして、人にして火にして人にして人にして三にして人にして三にして天地に先ちて存する物」なる物なり。

零なる靈にして「陰陽不測之神」にして「水火既濟」にして

三三にして空なる實なれば、完全圓滿なる身にして實にして、充塞し稔りたる物なり、三なるなれば一にして〇にして十にして

〇にして火なる日なり光なり。

「神光有れと云ひたまひければ光あり」と云へる光にして、

之れを水とは云へるなり。

人を分ちたる水なり水なり水なり出なり 申なり串なり千なり。

而して稜威(みづ)なり瑞祥(みづ)なり。

「みづ」にして「みづつ」にして〇の〇(ひふみ)にして一

二三にして、空にして實にして有にして無にして大極にして小

極にして窮数にして満数にして「天の水と地の水とに分ち給へり。則斯くなれり。」と云へる天

地の水にして、火水未済にして

水火既済にして天地否にして天泰にして湯なりと支那人のへたる「ゆ」にして、水火(り)にして〇の産出したる〇

り。両者合体して新なる簡体を

き成したり、子孫を産出した事業を成就したりとの義なり

此の身、此のままに新なるを築き成したるを大死なり再なり再臨なり涅槃なり。

釈迦にして、基督にして、孫にして、天子にして、神人

り。圓滿具足せる身なれば十種宝(とをかみ)と称へ、饒速尊と讚美して死者の蘇りたる

なり。はるひひめはるひひめはる

ひめ。あちめあちめあちめあちめ

ちめ。ああひがてんじんゆうあい

う。以上

昭和十一年九月二十三日

カズの起源

人間に「数」が有る。数の運用に依つて他の生物に優る生活を営み、文化を築く。此の数はどうして起つたのか。私どもの言論行為はすべて、自分自身から起る。自分自身の組織に基いてそれが、そのまま外に現はれる。従つて「カズ」もまた、自分自身の内に在るものが、外に現はれたことに違ひはない。

さて、自分自身を省察するに、最初は、漠然と見て「一つの魂だ」とするその「一魂」を分割するとして、初は二分する。更に二分し、又更に二分し二分して窮極に到達するとする。けれども、その窮極と呼ぶものが、果して有るであらうか。恐らく、有るであらう。が、また恐らく、無いであらう。想ふに、「窮極」は、無くて有るので有って無いのであらう。このことは、この「一魂」を累積し累積して、有らんかぎりを累積し盡したとした場合もこの分割し盡した場合同様、それが、有るでもあらうし、また、無いとも言へるであらう。で、このやうな状態は「有なる無」でもあり「無なる有」でもある。

両様の表現をするのは、分割し盡したと見た場合は、「無なる有」で、それがまた、「有なる無」だとも言ふべく、累積し盡したと見た場合は、「有なる無」で、また「無なる有」だと言ふに當る。それは、説明の便宜で、詞

を変へるまでで、事實は、ともに、〇と描くべきである。つまり、「無い」のである。けれども、頑空・絶無ではないのである。また、「有る」でもある。それは、計算の場合に、〇は零で、数としては「無い」と算へるが、もしもこれを取り除けば、「位置」がわからぬから、計算は成り立たない。で、この、「零」は「無い」ものであり、有るのでもある。「これを古典には、「高天原」とか、「虚中」「虚天」などと記してある。が、共に、それは、「神の生れられる所だ」とあるから、実に面白い。

さて、この「無」即、「零」だが、これは、全宇宙の一切合切を包括して居るのだから、勿論、一切の数は、此の中から生れる。「一二三四五六七八九十百千万」等、皆然うである。仮に、譬へて言ふならば、「零」は空間で、「数」は物体と言ふことができる。空間が無いならば、物体の存在を認めることはできぬ。或は又、「零」を大海に譬へるならば、「数」は、そこに遊ぶ魚とも言へる。この場合の空間や大海は、明に、物体や魚類を産出する母胎であると同様に、この「零」も「数」を産み出す母胎である。

きである。と同時に、分割し盡した最小のものが「零」だから、これは明に大きいとか、小さいとか、多いとか、少いとか、計算することのできぬ「窮極」である。

すると、「窮極」はやはり「実在」のである。その「実在」とは、即、「一」である。「無」と見たときには、「零」であり、「有」と見た時には、「一」である。そのもの自体に交りはないが、それを観る人の異なるばかりに、「その名が変る」。さうして、これは、すべてを産出するのだから、同時に「重重無盡無量」である。

そもそも、「箇牀」の成り立つには、「種子」が無ければならぬ。その「種子」は大きい面から観れば、全宇宙神であり、小さい面から観れば、最小の「種子」である。この最小の「種子」が、最大な全宇宙神の「力」に由つて旋回し統一し、重なり重つて、各自各箇各箇の存在を示す。

ここで、まことに奇妙で、最も重要で更に、修行者の誤解し易い、二つの問題を指摘しておきたい。

その第一は、最大としての「零なる一」は、全宇宙を包括してゐるのだから、「二」「三」と殖えようはないと思はれ易いが、この場合は、最大なる一が割れて、二、三、四、五と別れてゆくのだから、数として見れば、それがつまり、増すと言ふことになる。分割

されるから減るのであるが、反対に、数は増すのである。それだから、この全宇宙を数として、一と見れば一であり、二と見れば二であり、三と見れば三。四、五、六、等と見れば、皆共にそのそれぞれなのである。

第二の問題は、この「零」即ち「〇」を重重無盡と見た場合、「その各々は決して同一ではない」と言ふことである。譬へて言ふならば、箇牀箇牀を人間として見るならば、すべてが人間である。けれども、分けて見れば、男女國籍老幼の別は云ふに及ばず、その言論行為の同一な箇牀は何處にも無い。で、その最も異つたところの男と女。それが結合して、夫婦となるわけである。もしも、全然同一ならば、結合の要もなければ、結合することでもできぬのである。異なるが故に、結合することができし、結合して、新なる箇牀を産出するのである。

さて問題をもとに戻して、箇牀の成り立つ初めですが、その種子としての〇が、内容の異つた別の〇と組合ひ重り合ふと、勿論、〇である。さうして重ると言ふからには、必、重つた「点」がある。その重点には、また必、表と裏とがある。で、先づ、その重点の「表」を考へて見たい。

舊約聖書の創世紀に、「神その象の如くに人を創造たまへり」「エホバ神その創造たまへる人より、肋骨を取りて女を成り」とある。これで、「一」が

「二」になったのだが、ここで重要なのは、この創造には、全宇宙神の「力」が原動力であったことである。

さて、かくて、「成立した」簡鉢は、大根本の種子である全宇宙神の「力」と、次ぎの種子としての「男」と、更に、之れと結合すべき「女」との三位一體である。これを簡鉢の位置から見れば、男と呼ぶべき最初の「〇」と、女と呼ぶべき次ぎの「〇」とが結合して、「①」と呼ぶべき新しい「簡鉢」が出来た。さうして、大魔王神力、全宇宙神の「力」が之れを創造したといふので、この「神の力」を、数としての「三」で、「①」の「重点」だとする。さうして、これを重点の「表」と呼ぶと同時に、この創造の「神力」は、必や、破壊をも司る。なぜならば破壊せねば、創造の為ようは無いからである。この破壊の「神力」は、数としての「四」で「重点の裏」で、「全宇宙としての（神魔）の半面と見るべき大魔神力である。

以上で、簡鉢の成り立つ原型が整備されたのである。この「簡鉢成立の原型」には、さきに譬で云ったところの空間なる外廊の有ること、またもとよりである。この外廊。即ち、大空であり、大海であるものとは、また勿論「母胎」で、その中に、魚の如く、鳥の如く万有と呼び簡鉢が生育する。これを数とすれば「五」である。創世紀で言ふならば、エデンの園に、男と女とが

まだ禁断の木の実を味はず、平和に安楽に暮して居る姿である。かくて、「数」は、五で成り立つ。五で足りるのである。それで、「五」を「成数」と呼び、また「正数」とも言ふのである。

物の生を出づるには、先づ、陰陽の合体といふ前提がなくてはならぬ。

動物世界の然る如く、山川草木の世界も、その形こそ異れ、必やまた然うであらう。何故ならば宇宙の眞理は一貫して、変らぬからである。さて、この陰陽を形にあらはせば、凹凸となる。この凹凸を前述の〇の中に納めて見ると①ふ恰好になる。これが太陽の象形であり、日の字源だといふから、古人の明には今更の如く驚く。陰陽の合体によって生じた物は、又必や陰陽の合体でなければならぬ。何故ならば人の生める子は人であり、猫の子は猫であり、犬の子は犬に外ならぬからである。繰返すが宇宙の眞理は一つである。

宇宙は、全体であれ、一部分であれ、大であれ、小であれ、一切合切、この①である。この①は、陰陽であり、男女であり、神魔である。そこで、美しきエデンの園はまことに神の園である。が、しかし、この神園にも魔が深く潜んでゐる。それに留意せねばならぬ。果せるかな。蛇のすすめに従って、禁断の木の実を食った人間は終生、否、否、子孫孫に至るまで苦しみ悩まねばならなくなったのである。それで、

正数なる五が、実は、その奥深く、この魔を抱えているのである。これが、五の次に来る六である。故に「六」は、「五の余すところのもの」「五の産出するところのもの」であるが、未、簡鉢をなしていない。即、表面に顕れていない。それだから「零」である。で、これを「六の零」と呼ぶ。颱風の中心は、無風状態であるそうだが、実によくこの「六の零」を現している。この六は、五の制御力が緩むとすぐ暴れ出すから始末が悪い。これが「七」で、「ナ」である。七は勿論颱風そのもので、菜とか、名とかの如く、多数であり、我等の周辺である。しかし、颱風が永久に吹いてはならず、人間が何万年も生きてゐても困るし、草木が何億年も生きてゐても始末が悪い。始末が悪いどころか、それでは固定で、膠着で、無限に流行転換する宇宙の事理に反するので、これは適当に殺されたり、又活されたりする。

この殺活の妙用を司るのは「八」である。八は「ヤ」で、「矢」である。出でては帰り、降りては又行く。即、天界にも地底にも自由に出入往還する。この「八」の働きによって、宇宙の万有は整理されて平衡を保つ。この八の活用によって整理された数が「九」である。その最も好例は地球である。そして、数の段階はここに窮る。で九を窮数と呼ぶ。九は「コ」である。「コ」は八に依って生み出された兒

である。この「九」をまた「ココノ」と数へる。「兒兒野」で、窮数として總べてを攝理したのである。日本語で数を算むに、「ヒフミヨイムナヤコト」と呼び、また、「ヒフミヨイムナヤコノタリヤ」とも呼ぶのだから、九の次の「十」は、「ト」であり「タリヤ」であり、完全円満に具足したので、天界と地底とを一周し得たので、満数と呼ばれ、神人と称へられるのである。「タリヤ」の「タ」は、「足り満ちた」との音義であり、「リ」は、調伏済度の音であり、「ヤ」は、終止符であると共に、前進上升の義である。つまり、出入往還である。それで、十は、「一二三四五六七八九」が完全に統一し、元の一に帰ったと言ふので、所云、「九魂統一、十魂尊貴の玉鉢身」なのである。

これが日本民族の承け得て来た「神数観」の概要である。

「唯独」。我「唯独」。万人悉皆親健。兒孫蕃蕃。稔豊穰

昭和三十一年十月三日

（「未来誌」より）

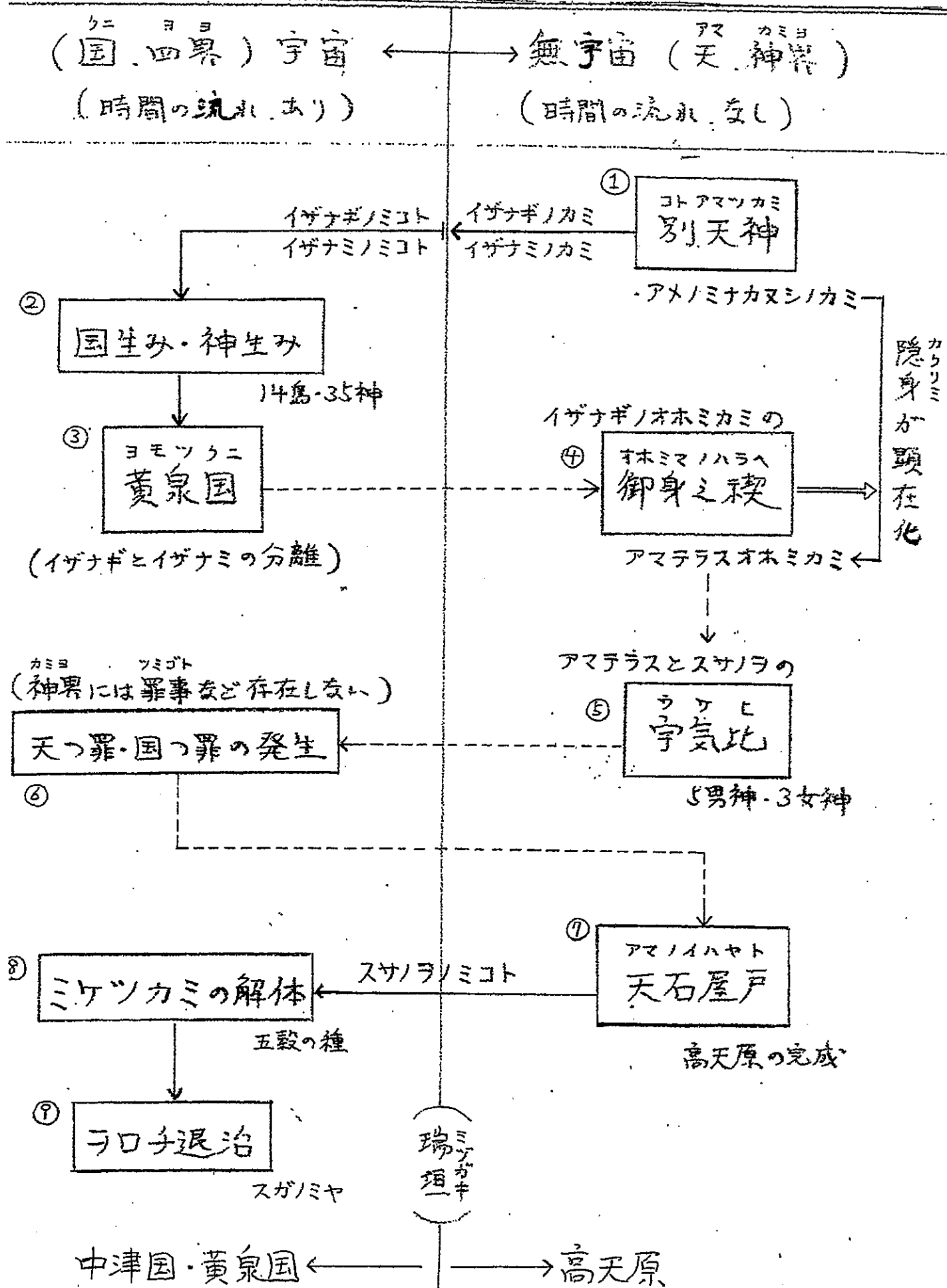
ミカサフミ解説(三)

ミカサフミハニ祭りのアヤ(二)

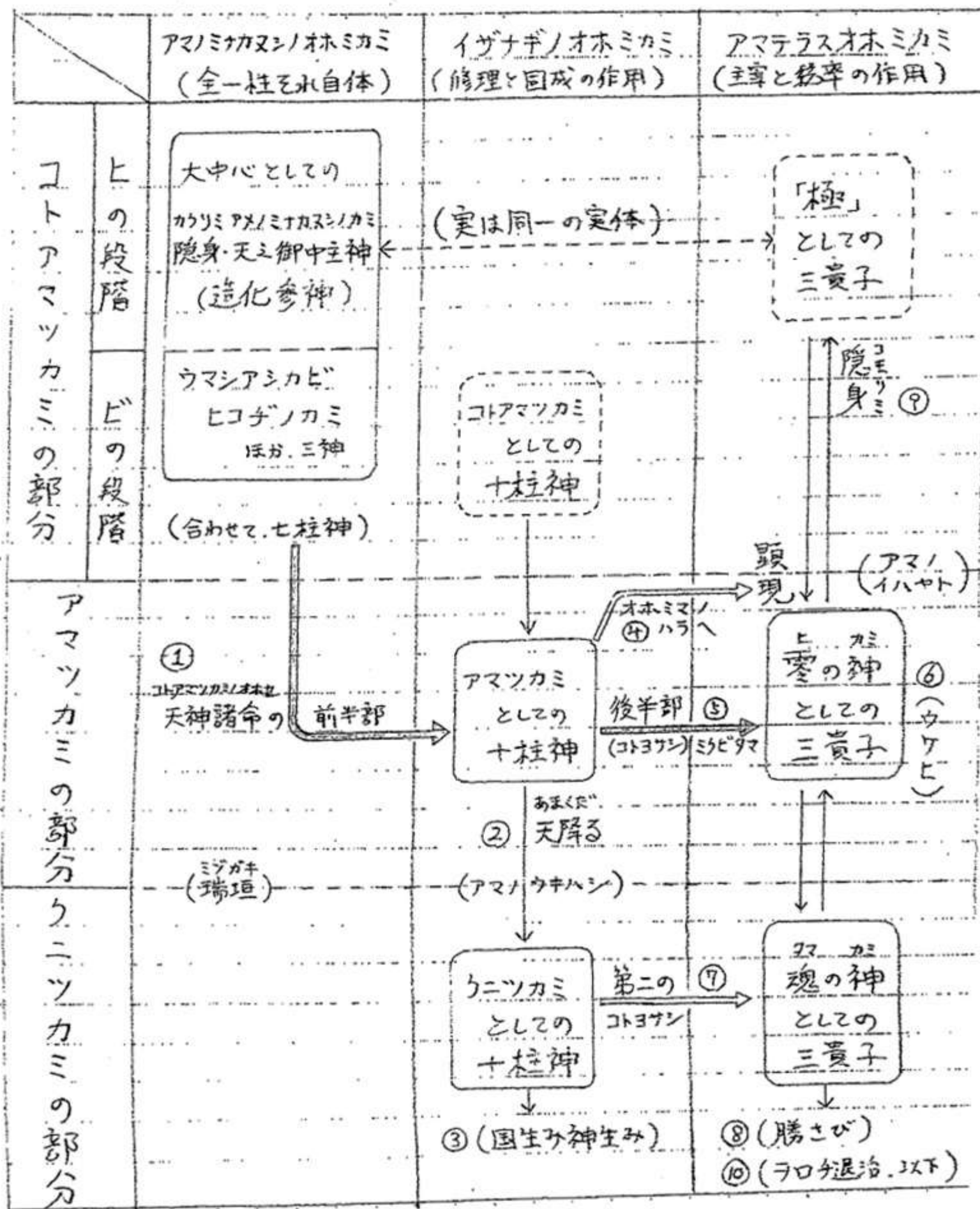
大意

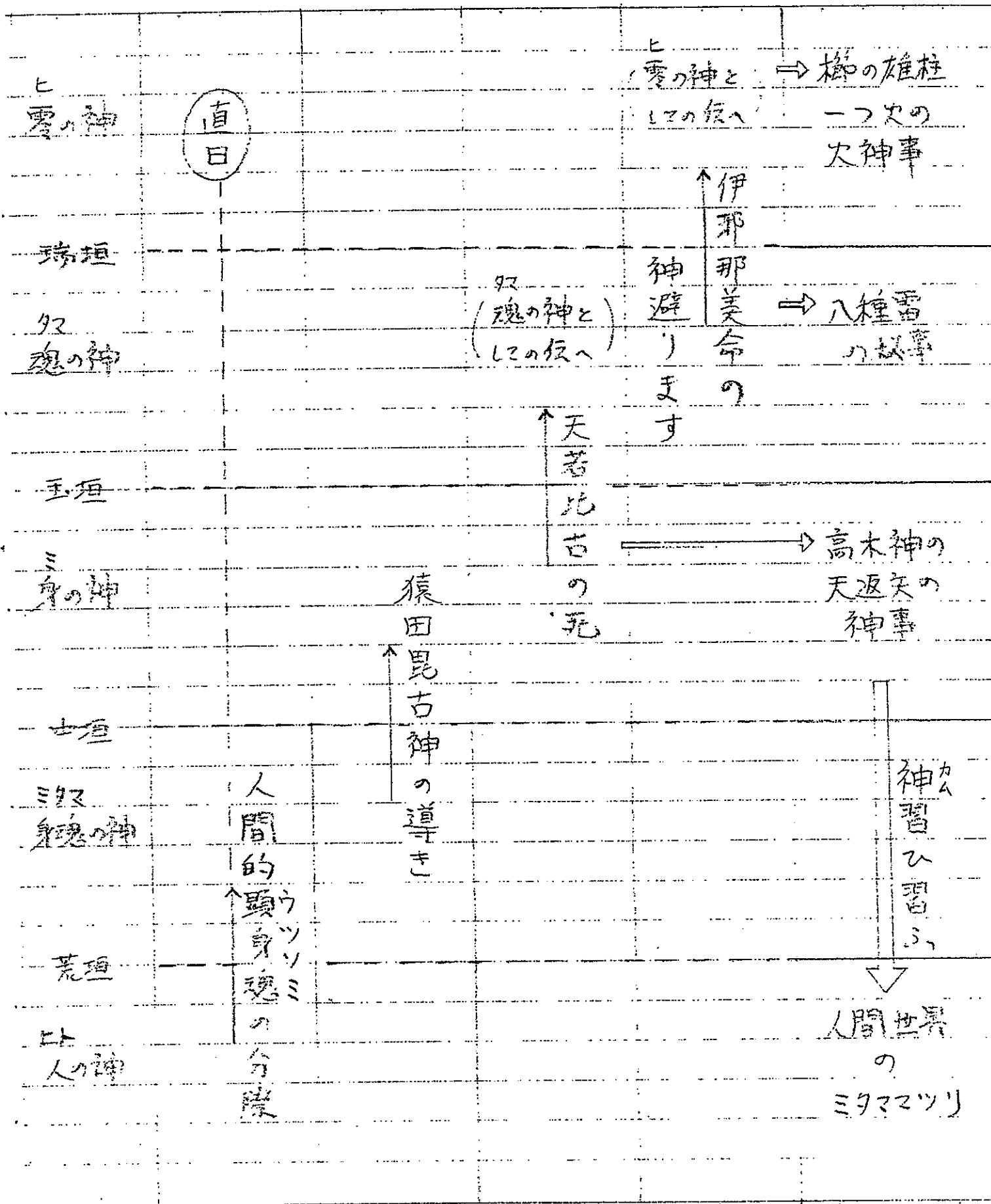
地鎮祭の次第として、先づ地面をならします。次にはゆふを四方と中央に

古事記神話の解説

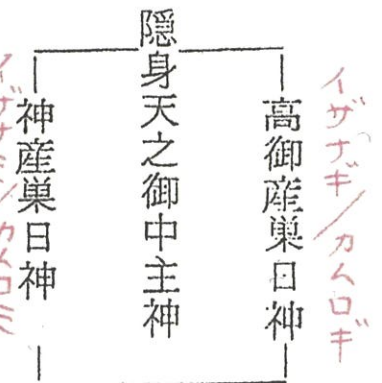


オホミカミ コトアマツカミノオホセ
 図表：大御神と天神諸命

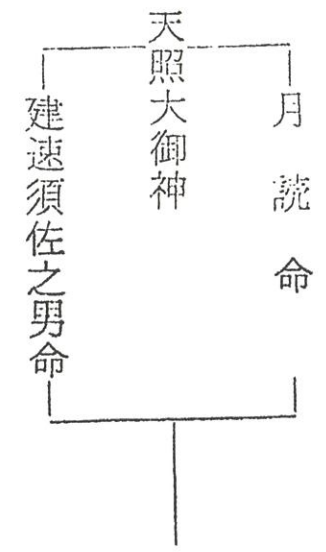




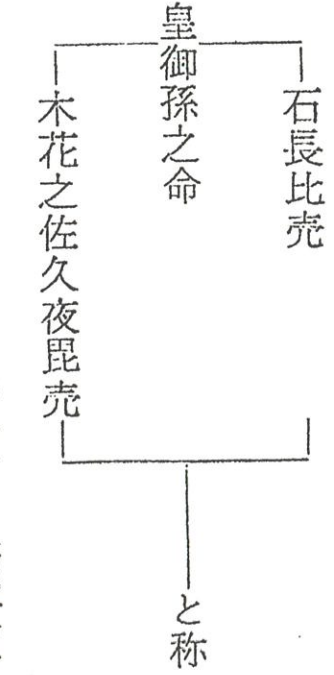
はてしと神の零



はてしと神の魂

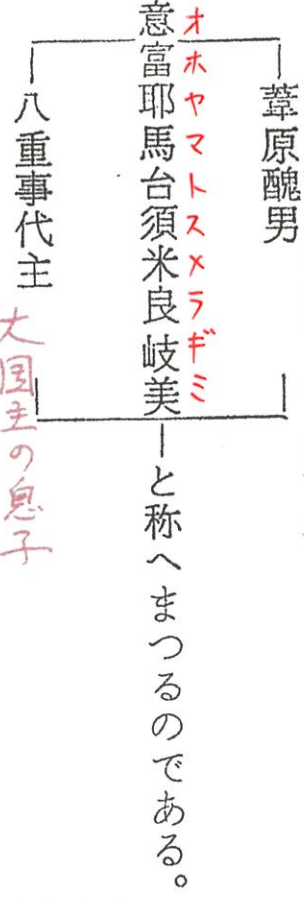


はてしと神の身



の神としては

大國主の別名



意富耶馬台須米良岐美——と称へまつるのである。

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに
 よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、
 アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも
 行使できるようにするのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に
 起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官
 的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀、生る矢で八十神と
 阿那畏。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御

現はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隠身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

神ながら、教へのままに、成り成れる、新宮處。須賀須賀斯加茂。

第六節

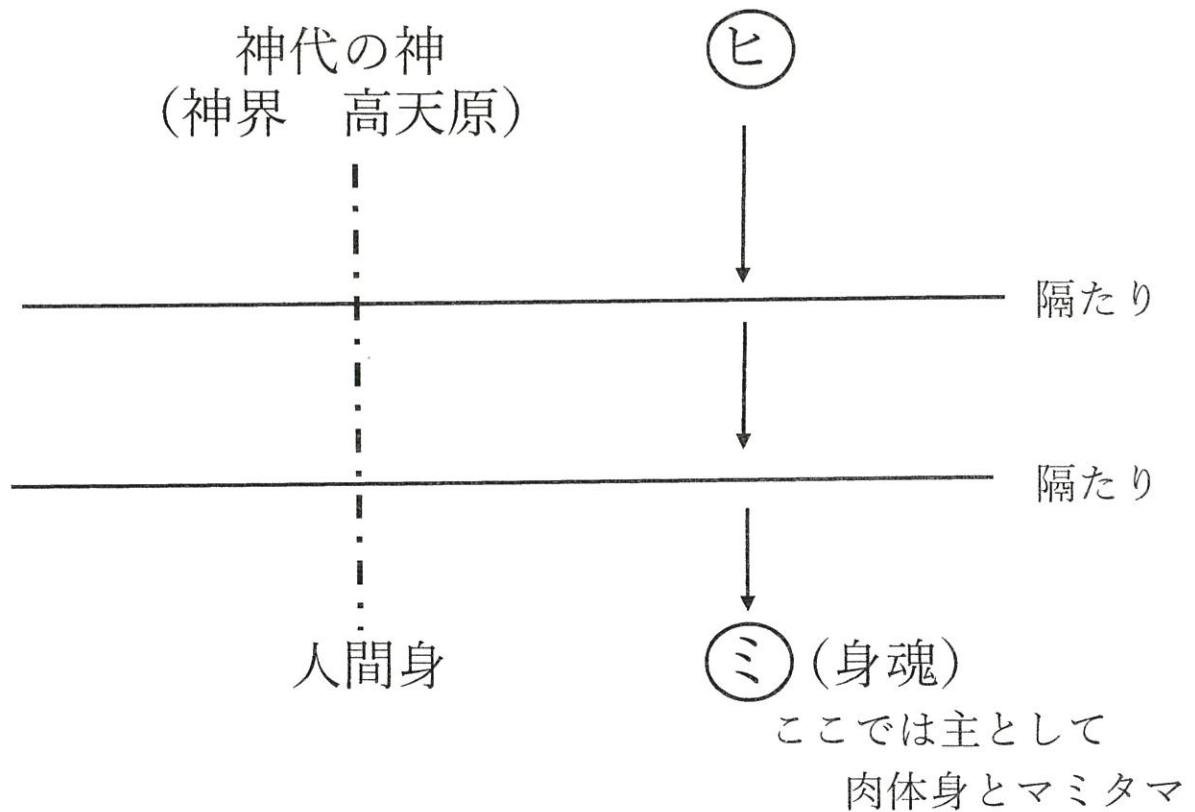
想はずも、問題が極秘のことに涉つたために、幾度か筆を擱きながらも、また續けて來ました。けれども、「二河白道の誓約」を説き、「天宇受賣・比良夫貝の秘」を語るやうなことは、天津神・國津神たちの賞で給はぬところ。寧、魔神邪鬼の來り窺ふこととなる。それ故、その人にあらざれば、其の身を破り、其の國にあらざれば、其の國を亡ぼすのだと、固く誠められてある。

ところが、古典は、大半其のやうな祕事に屬するから、解釋などすること無く、專念一意、唯唯、拜みまつるべきである。禪僧が、大般若經理趣品を佛體として禮拜供養するなどは、之と等しき一例である。

「古典は解くべからず」と、「守護神」は教へさせ給ふ。守護神ミマモリノカミと白しますのは、人の身を地球上に降し給ふと共に、その終生を守護し監督して離れることの無い各人各自の主神にたましますのである。

ところで、人の生れて來たに就ては、各自各自に其の天分が存る。その各人各自の天分は、「産土神」ウツスナノカミの與へ給ふところで、須佐スサの神性カムサガに依るのである。之を言ひ換へると、人の生れるに就て、その箇性は、産土神から受け、その類性は、鎮守神から授かると白すのであります。

さうして、その受け得たる天分を完全に發揮することは、鎮守神の守護に依るのである。天與の天分は産土神から受けても、之を養ひ育てて開花結實させるのは鎮守神である。



隔たりを取り払って考えれば

人間神もまたヒノカミに直結している

(生死一貫 顕幽一途)

ミタ 火

逆に言えば日神 (中心) の  のミヒカリが

「今ここ」にさしとおって

「今ここ」もまた高天原の一部であると解るようになる

→そうすれば、産土神が神産巢日神のウツシオミで

鎮守神が高御産巢日神のウツシオミである

と解るようになる

古事記の記載は、一見まことに複雑ではあるが、

第一章は、別天神の神界記であるから、之を數理觀から言へば、最初に一を教へ、その一は、三から成り立つて居り、その三は、經と緯との二であるからとて、時間と空間とを現し來る本體としての零を知らしめたのである。

第二章は、宇宙成壞の垂示であるから、時間と空間との二つが一つになつては十で、その十が別れては、破壊と呼ぶところの死で、その死も結び來れば、建設と呼ぶところの生で、成で、此のやうな變化は、二、三、四、五、六、七、八、九と稱するので、その成り餘れる三、五、七、九の四と、成り合はざる、二、四、六、八の四との合ひては、八である。此の八に依つて、宇宙の萬有は制御せられ整理せられて平衡を保つことが出来るのである。

第三章は、高天原築成の祕儀である。之をミソギと呼んで、三十神界の生滅起伏である。

第四章は、罪惡觀で、數の分散である。

第五章は、高天原開闢記で、三十六の聚散離合である。

第六章は、罪惡觀の第二で、復活の垂示である。五の百倍と、百の百倍と、千の千倍との九である。と云ふと、ひどく普通學には遠ざかるが、神界の事理が複雑なのであるから、祖神垂示の數理觀は懇切丁寧であつても、之を理解することは、まことに容易ではない。で、以下之を省略することとしよう。

第七章は、中心觀で、箇體成立の原理に立脚して、國家觀を教へ、特に日本建國の精神を明にされたのである。第八章は、綿津見宮と日少宮、産土神と鎮守神との關係を説示したのであり、

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神德ミクラキは、そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

天照大御神・天照皇大御神・天照坐皇大御神・大日靈貴尊・大戸日別神。

と、拜みまつるのである。固より、神代の神にてましますと共に、百八百萬魂神と御顯れ給ひつゝまします天津神・國津神なりと拜みまつるのである。

天津神輪、國津神輪の神挂り。かゝりて今ぞ、伎美が生れます。

別れては遇ひ、遇ひてはまた別れ、破れては出來、出來てはまた破れ、生れては死に、死にてはまた生れると、人の身は驚き騒ぐ。

伊邪那美命・建速須佐之男命・十七世神を経て造り成された出雲八重垣妣の國は、伊邪那岐大御神・天照大御神・天忍穗耳命・天津彦彦火瓊瓊杵尊の神の日を仰ぎて、こゝに復び、地天泰平の歡聲を揚げたのである。

かみのひの、ひかるをみれば、あめつちは、こをろこをろに、むすびむすべる。

天成地定。ああ是れ、神のみ恵なり。また是れ。神の神わざなり、實に是れ。神のみ心なり、み祖の神の神挂りなり。

神魔出沒蓋如此、神國現成又是如是。生死遷轉連環無際。今日畫得矣。無經無緯唯一球體。

2019.10.22. (火)

第265頁の説明

第一章 古事記 51頁 「別天神五柱」

(実際には 七柱目までがコトアマツカミ、
零と一・二・三について述べたもの。)

第二章 " 「神世七代」

(十柱神の構成について述べたもの。)

第三章 古事記 53～61頁 「伊邪那岐命と伊邪那美命」
1～4.(国生み・神生みの神話は、
高天原の築成を表現したもの。)

第四章 古事記 61～67頁 「同」 5～6.

(コモツクニの神話は、罪について述べたもの。)

第五章 古事記 69～91頁 (「同」 7～9.
「天照大御神と須佐之男命」 全)(ワカマノハラの神話は、
36. の集散諸合について述べたもの。)

第六章 古事記 91～111頁 「大國主神」 全

(いわゆる出雲神話は、再び罪について
また、復活について述べたもの。)

第七章

古事記 111 ~ 135. (「葦原中国の平定」 全
「遍々其命」 全)(天孫降臨神話は、中心と外郭について、
箇条や国家の成立の原理について、述べたもの、

第八章

古事記 135 ~ 147

「火遠理命」 全 (JXと、
上巻あり)(山幸彦の神話は、綿津見宮が無宇宙のたとえ
であることなどについて述べたもの、

第九章

(149-161)

(中巻)

・死生解脱の秘 (神武東征の伝説などが
これに相当か?)

第十章

(315-317頁)

(下巻)

・神言霊 (「雄略天皇」も菟城山の伝説が
これに相当か??)

は亡くなつてしまふ。

今仮に、○と書いて国を示すものとする。その中央に一点を描く。それを国の中心とする。○中心が有り外郭が有つてはじめて体を成し用を現する。ところが、「民主」といふ詞は○^{外郭}だけを認めて、未^{中心}○を知らない。是レではまだ国家組織が成り立つて居ないので、古典に所云「クラゲナスタダヨヘルモノ」である。ところで、然う云ふと、「マフツノカガミ」との判別に迷はれるかも知れぬ。

此の両者を共に○と書くことは出来るが、「マフツノカガミ」は天照大御神の和魂だから正確には、
 と書いた○であり、「クラゲナスタダヨヘルモノ」とは・も——も無い○である。近頃日本で騒ぐ民主の語は、此の空零の○だけを見て居るのだから大海に浮べる雪にも似て危いこと甚しい。

どうも是レに・を与へ——を知らしめて「天照大御神・天照皇大御神・天照坐皇大御神・大日靈貴尊・大戸日別神」即、「アアヒガテンジンユウアイコウ」と拝ませたい。

此のために我が「未来誌」は生誕したのである。

以上 昭和廿七年九月九日 未明三時筆録

多田先生が神象として書く「○」には二通りの意味がある。

一つには單なる資料、中心を持たない外郭の意味であり、（クラゲナスタダヨヘルモノ）

もう一つには神界の「零の海」全体（大宇宙そのもの）の意味である。（マフツノカガミ）

これをフリトでは「アマテラマオホミカミ、アマテラマメサホミカミ、アマテラシマメサホミカミ

オホミカミノミコト、サホミカミノミコト、シマノミコト」と読む。

一ニ三四五六七八九十百千萬

2. アアガ
実体

アマテラスオホミカミ
天照大御神

1. アアヒ
境地

アマテラスオホミカミ
天照皇大御神

3. アアヒガテヒシ
作用力

アマテラスオホミカミ
天照坐皇大御神

4. シユウアイコウ
人間世界
このフなかり

オホトヒワケリカミ
大戸別神

オホヒヒルメムチハミコト
大日靈貴尊

行人去来(三)

多田山公遺稿

チチハハ ミオヤ ミオヤ
ナベテノヒトビト ワガサキノ
ヨノ チチハハ ミオヤ ミオ
ヤ ワレニユカリアルナベテノ
ミタマ ミナトモニサトリサト
ル サトリサトレバ アマネク
ヒトツナリ アアヒガテンジン
ユウアイコウトタタヘマツルナ
リ。
それで此の大神文は生死を通
じ自他の身魂を伊都伎まつるも
のである。
アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。
アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。
然れども、古典は之れを載せ
ざれば、人或は怪しまんか。
仍つて今少しくこれが解説を
試みる。

日本古典に三貴子と傳へたる
は、伊邪那岐大神の御身之禊
(おほみまのはらへ)に依つて
其の神徳を明にせられ、大日
貴尊(おおひひるめむちのみこ
と)の御名は三貴子の御継紹を
人間身の位置より仰ぎてたたへ
まつれるなり。
而して更に、大戸日別神(お
ほとひわけのかみ)と称へまつ

るは、晃耀赫灼一圓光裡の波瀾
曲折たる上よりの御称号にして
共に、春日比咩(ひるひめのかみ)
にてまします也矣。

故に、

アアヒガテンジン
天照大神天照皇大神天照坐
ウ
皇大神大日貴尊大戸日別神

と記しまつるべきか。

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

アは開き、ウは闔づるので、
今仮に此の十四音にて一図を描

かんか。

(ここに図が入りますが略し
ます)とも成るべし。

嘗て鷲宮祓禊所に在りて、左
の一語を書く。

山裡清明

蓋、是の大神文の神相(みす
がた)か。

全年三月三日 敬虔拜書

◇

二月十四日 此の地方として
はまことに稀なる大風雪。

爲に、祖父が記念の蜜柑、根
本より折れて七十餘年の命数終
る。

感懷無量、此の文を草す。

噫。

ちちははのかたみのわが身わ
が心きよくただしくよをばわた
らむ。

ああひがてんじんゆうあいこ
う。

寄る年の波をたたみて故郷の
道遥なる旅をしぞ思ふ。

キヤウハクコジャウ ユキガイガイ

鏡泊湖上白雪皚皚。

エンキンノコラウ ツキニサケテ

虎狼遠近半月凍結。

コシウ カイヲウシナイ ヒトハ テラコマスグ

孤舟失權主客拱手。

イマダキカザルナリ サンセンボウクワイノヒ
三千年來未聞之非。

山の温泉の夕術無み前の世の
運命のままに人の逝くなる。

海原を照らして今日も少名比

古加賀美の舟の往き返るなる。

生死遷流必竟如是也矣。

山程清

山

程

清

此の「華の神」は蓋、全宇宙神の御意志であるから、人類世界にありて、此の「カミ」のままなる聖者が国を建てては、「全人類主宰の大天皇」と称へまつるので、その国は天皇国である。

全人類主宰の大天皇を中心と仰ぎまつる人類は、中古以後、各地の歴史が伝ふる如き、又或は、現在世界に見るが如き、隣邦を切り取りし、隣人より略奪して、自国自身のみの富饒強大を謀り、地球上を分割し占據するが如きものでないこと固よりである。

噫。

旧邦は既に廃れた。

人は皆、全力を捧げて、新邦の築成に励まねばならぬ。

その新邦の目標は、「天磐座」である。

「アマノイハクラ」と云ふのは、下も上も内も外も、スミスミテ スミキリタルもので、それは、

「山裡清明」である。

山裡清明の文は、仮借なること勿論で、外から見れば、ガヤガヤ ゴチャゴチャ と騒ぎ乱れてゐるものも、中は スミスミテ、静に穩に キレイ だとの義である。

「山」とは、水平面から凸出したので、顯著なので、支那人の象形文である。日本語では「ヤマ」と呼ぶ。

「ヤマ」の「ヤ」は、「ハ」であり「矢」であり、出でまた出づるものであり、「マ」は、円なので、身魂なのであるから、「ヤマ」とは、水平線上に突出隆起し、やがては、一箇独立体を築き成すもので、その極は「球」である。つまり、「小宇宙」で、経と緯とを有する箇体である。之れを客観すれば、現在私どもの見るが如く現

象世界である。が、その裡は澄徹玲瓏、一塵を止めざる零境である。それ故、「山裡清明一塵不起」とは、神界の形容である。

「大海平等一波不立」と云ふも同様で、同じ神界を別の面から形容したまでである。唯、前のは、大宇宙を  と描いて、成数としての五が、更に神業を完成すべく、一步を転じたので、「ム」で、六である。之れを六の零と呼ぶのは、此  () の如くで、未、その主を認めざる大虚空であるから、零海と呼ぶべき「〇」である。「山裡」も「大海」も、人間の平生見慣れた物に寄せて、人に話したので、共に清明澄徹の靈境で、その主を仰げば「カミ」である。  も  も共に空中で零で、やがて、それは、家屋で宮殿で、オホミソラでオホウミで、数としての零で、人間的には「何も無いやうで」、さればとて、決して「無い」のではない。とても云ふべきである。一塵不起、一波不立と云つて、一塵無しとも、一波無しとも云はぬのは、此の故である。實際に「無い」のではなくて、起らぬので、立たぬので、何時起るかも知れず、何時立つかも知れぬのである。全宇宙は悉皆、「神魔」の体であり、用であるから、裡と外と離れることはできず、別にはならぬこと固よりである。

「此ノ時迷フ経ニ処。形問フ影ニ何從」

此の「形を神と云ふべくんば、影を魔と云つても可い」。神魔雜糅なのは、逕に迷ふ処であり、明め得れば、神魔同凡に在るもので、魔もまた魔とは呼ぶべからず、神界築成の資料と成るのである。

「天と地と未割れず」とか、「天と地とを別け来し」とか、陰と陽とも分れず」とか、「独神」「一神」等と紀記などに、載せてあるのも皆、神魔同凡の「カミ」で、支那文字に  と作り、猶太の創世紀に、神は神の姿に似せて人を造つたが、その人とは、未「男と女と」別れぬ「独」だと伝へたなども、「カミ」と「ヒト」との関係



第九章は、死生解脫の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神德は、^{ミタラキ}そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾^ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとりの、さとる。さとりの、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。)

